

「夢」をもち、「夢」に向かって努力する生徒

原北中学校 学校通信



令和 2年12月25日 第16号

福岡市早良区小田部7-11-1

電話 092-851-3344

発行者 校長 福崎 浩信



新しい年の迎え方



年の瀬が近づいてきました。時間の流れの中でとても大切な節目の一つです。

何となくザワザワと過ごすのではなく、部屋や机の上を掃除し身の回りを綺麗に整理整頓することが大切ではないかと考えます。また、心の中にあるいくつもの小さな引き出しにもいろいろな思いが放り込まれていると思います。引き出し毎に入れるものをまとめ直し整理し直すこともとても重要な事です。どうするかと言えば、引き出しにしまい込んだ事を思い起こし、我慢して乗り越えてきた自分、支えてもらって成長した自分、友達とトラブルって謝りそびれて心の引き出しが重くなっている自分などに対し、褒めたり、感謝したり、成長を確認したり、謝ったりして心の中もしっかり整理して新年を迎えることが大切だと考えます。

「謝る」という言葉と「感謝する」という言葉はつながりがないような言葉なのに、同じ「謝」という文字が使われています。「謝」はごんべんに射ると書きます。「射」は弓で矢を放つことで、放った後、ピンと張りつめていた糸がゆるみます。そのことから、「謝」は「話すことで心の負担を軽くしてすっきりする」という意味になるそうです。節目の時期に自分の心を見つめ、人との大切なつながりを思い出し、謝罪と感謝の気持ちをもって心の整理をすることは集団・個人の更なる成長につながる重要な取組だと思っています。

道は開ける(成せばなる) 「鋭い観察眼・・・円山応挙(1733-1795)」

志を持った人は、途中、回り道をして、必ず自分の思った方向へ進んでいくものです。

応挙は、家の仕事が農業だったので農業をしていましたが、寺へ小僧に出されます。しかし、寺を飛び出して、京都へ出て、石田幽汀という画家の家へ住み込んで、働きながら絵を学びます。京都の神社やお寺には、たくさんの絵があるので、それを頼んで見せてもらい模写をしたり、西洋から伝えられた遠近法を取り入れて、風景画を描いてみたり、自人物、花、虫、魚、鳥、目に入るものは何でも描いてみたりしました。たくさん描くことで絵の力をつけていったことになります。

ある時、応挙に絵の注文が来ました。寝ている猪を描いてくれると言うのですが、応挙は、まだ寝ている猪を見たことがないので郊外から物売りに来る人に、みつけたら知らせてくれるように伝えていました。数日後、知らせがあったので写生帳をもって出かけ、丁寧に写し取り、帰ってからそれをもとに絵を描き上げました。しかし、できあがった絵を見て、どことなく気に入りません。ある日、山から炭を売りにきた老人がその絵をみて、「この猪は病気で死にかけていますね」と言ったので、「どうして病気だと分かるのか」と尋ねると、「猪は、寝ていても、背中のかかり毛が立っているものです。この猪の背中の毛はみんな寝てしまっている。それは死んでいるか、死にかけているか、どちらかです」

応挙は、早々に、描いた猪がいた場所に出かけました。そして物売りの娘から「あれからしばらくして死にました」と伝えられました。応挙は、炭売りの老人の観察眼の鋭さに感心しました。このエピソードから分かるように応挙の描く絵は、「細密」といいれば良いほど細かく丁寧にみて美しい描き方で、しかも、鮮やかな色遣いがなされていたのです。